

三浦哲郎「盆土産」における「えびフライ」と「えんびフライ」

— テキスト・クリティックを応用した文学教材研究 —

和田 崇

【要旨】

本稿は、光村図書の中二生用の国語教科書『国語2』に収録された三浦哲郎の短編小説「盆土産」を分析した作品論である。分析方法としては、テキスト・クリティックを援用し、諸本の本文校訂をたどりながら、そこから浮かびあがる「えびフライ」と「えんびフライ」の校異に着目し、その違いの意味をナラトロジーの観点から考察した。断つておけば、「えびフライ」と「えんびフライ」の校異については、先行研究でもすでに加藤郁夫(二〇〇六)や三村孝志(二〇一〇)、昌二佳広(二〇一一)が論じている。だが、改訂前後のテキストに対する評価づけや、校異によって導き出される「語り手」の問題については、議論が尽くされたとは言いがたい。本稿では、校異と語り手をめぐる先行研究に示唆を受けつつも、これまでとは異なる「盆土産」の校異に対する評価を打ちだし、それを教材研究へと結びつけるための新たな物語の解釈を提示した。

【本文】

はじめに

短編小説「盆土産」は、雑誌『海』(中央公論社)の一九七九年一〇月号に初めて発表され、その後、短編集『冬の雁』(文藝春秋、一九八〇年)に

収められた(書誌については本稿第一節で詳述する)。

作者の三浦哲郎⁵⁾は、一九三一年に青森県八戸市に生まれ、四九年に高校を卒業後、早稲田大学経済学部に入學したが、次兄の失踪に絶望して大学を中退して帰郷し、二年間、郷里の八戸で中学教師を勤めた。そのため、「汁粉に酔うの記」(『毎日新聞』一九七二年一月二日)のように、彼の中学教師時代を彷彿とさせる作品があるほか、「盆土産」のように、青年の微妙な心理を描いた作品も多く描いている。五二年に教師を辞めると、次第に文学への志を強め、二二歳で早稲田大学仏文科に再入學し、同人誌に発表した作品が注目を集め、六〇年一〇月号の『新潮』に発表した中編小説「忍ぶ川」で第四回芥川賞を受賞した。その後も、長編小説「海之道」(『文学界』一九六七年一月号〜一九六九年一〇月号連載)など多数の作品を執筆し、二〇一〇年に七九歳で死去した。^{注(1)}

三浦哲郎の作品の中で「盆土産」は、芥川賞を受賞した「忍ぶ川」などに比べ、それほど文壇に注目された作品ではない。にもかかわらず、広くこの作品が知られているのは、中学校の国語教科書に収録されているからである。

『読んでおきたい名著案内…教科書掲載作品小・中学校編』(日外アソシエーツ、二〇〇八年)によると、「盆土産」の教科書収録は、光村図書が一九八七年に発行し、八九年度まで使用された中二生配当の『国語2』が最初である。引き続き、九〇年から九二年度まで使用された『国語2』にも再録され、その後、一四年間教科書に収録されなかったものの、二〇

○六年に再び光村図書の『国語2』に掲載され、現在に至るまで同教科書に収録され続けている。いわば光村図書の定番教材と言ってよいだろう。

その「盆土産」の梗概は以下のとおりである。同テキストでは、主人公でない視点人物を語り手として、「僕」や「私」などの自称を用いずに物語が展開する。主人公もしくは視点人物を「(小三の)息子」と仮称すると、息子の家庭は、祖母、父、姉の四大家族で、祖父と母はすでに亡くなっていて、作者の郷里をモデルとしている点や直接話法で記される方言の特徴、当時の東北行き列車の発着口であった上野駅から「夜行でおよそ八時間」という記述があることから、舞台はおそらく青森の田舎町である。また、父親は東京の工事現場で出稼ぎ労働をしており、盆と正月ぐらいしか家に帰って来ない。その父が、正月休みで帰ってきたときには、今年の盆には帰れぬだろうと話しておきながら、盆直前になって速達の手紙をよこし、盆には帰ることと、えびフライを土産にするから油とソースを買っておくように指示した。

崇 田 和

物語内の時間は、その速達が届いた翌日、盆入り前日の八月二日から始まる。父からの急な連絡により、息子は父親の好物である生蕎麦の出汁に使う雑魚を川へ釣りに来ていた。釣りをしながら、息子は速達が届いた昨夜から現在までを振り返り、まだ見ぬえびフライがどんな食べ物か想像をめぐらせる。また、息子はえびフライのことを「えんびフライ」と発音し、自分では正確に言えているつもりでも、周りにはそのように聞こえているらしく、姉に訂正されてしまうのだった。こうして息子が雑魚を釣り終え、父を迎える準備が整うと、父親は予定どおりに帰って来た。息子や姉にとっては、えびフライのみならず、保存用に同梱したドライアイスも初めて見る物である。そして、初めて食べたえびフライは、「いい歯応え」で「えもいわれないうまさ」であった。翌日の午後、家族は墓参りに出かけ、祖母の念仏に「えんびフライ」という言葉が混じるのを聞いた息子は、

早死にした母はえびフライのようなおいしいものを一度も食わずに死んだのではないかと思ひ、後ろめたさを感じる。しかし、その日の夕方に再び東京へ向かう父を見送る際には、正月にもえびフライを持って帰ることを促すかのように、別れのあいさつを言うつもりが不意に「えんびフライ」と口に出してしまうのであった。

「盆土産」については、光村図書一社のみが収録し続けている定番教材ということもあり、先行研究はさほど多くない。特に、授業実践の論文がほとんどを占めており、文学研究の分野ではそれほど研究されていない。それは、光村図書の指導書が「指導の展開例」として第四時の目標として掲げている「少年の父親に対する思い」や「家族のきずな」^{注2}といった主題が、比較的容易に捉えられるためであろう。

先行研究の中では、加藤郁夫の「えびフライ」と「えんびフライ」——「盆土産」(三浦哲郎)の改訂に関わって(『日文協国語教育』三六号、日本文学協会国語教育部会、二〇〇六年)が、自選全集へ再収録される際の改訂を取り上げており、論者の関心と重なる。加藤は、川で冷やしておいた父親のビールを息子が取りに行く際、隣の喜作と出会い、そこで息子と喜作の両方が発した「えびフライ」という言葉が、初出や初収録単行本と異なり、自選全集で「えんびフライ」に改められた点に注目した。そして、加藤はこの改訂を、「語り手と語られる対象との距離をより鮮明にして」、「語り手である「大人になった息子」が「あたかも小三の息子が語っているように見える」「語りの仕掛け」を可視化するものとして意義づけた。加藤の論考は、おそらく「盆土産」の校異を指摘した最も早いものである。

次に、三村孝志の「三浦哲郎「盆土産」論」(『新大國語』三三三号、新潟大学教育学部国語国文学会、二〇一〇年)は、作品の舞台や時代設定、語りの特徴、母を不在にした意味など、テキストを紐解く多角的な視点を提示している。さらに、同論においては、前掲の加藤論を引用して校異や語

りの問題にも踏み込んでおり、加藤論の修正も図っている。^{注(3)} 加藤も三村も、校異を語りの問題に結び付けている点が興味深い（校異と語りの関係については本稿第二節で詳述する）。

さらに、昌二佳広の「文学教材「盆土産」（三浦哲郎）の教材研究―「語り」の問題とその教材性」（『茨城大学教育学部紀要・教育科学』六〇号、二〇一一年）は、加藤論と二村論が指摘した校異も踏まえたうえで、「物語世界に内在する生身の人物が語り手でありながら「僕は」「俺は」といった主語が一切用いられず、「一見小学三年生の少年でありながら、小学三年生の用いるそれとは到底思えない語彙・言い回し・構文をもつて語る」「特殊な「語り」の方法」に注目し、その認識を教材研究に導入する可能性を示している。本稿に示唆を与えた論考であり、「盆土産」の語り手の問題を教材研究に応用するうえで、現時点で最も真摯に取り組んだ論考である。

また、語りの問題については、野中潤の「教材としての「盆土産」（三浦哲郎）」（『国文学論考』五三三号、都留文科大学国語国文学会、二〇一七年）においても、「叙述されている表現の態様は、明らかに小学三年生のもではない。視点人物が少年であるとしても、彼に寄り添いながらその行動や心理を描写している存在が別個に存在する」と、昌二論とほぼ同様の考えが示されている。

以上のように、先行研究の多くは、視点人物に対して人称代名詞を用いない「盆土産」の特異な語り手に着目しており、それと諸本の異同を関連づけている論考も見られる。本稿では、これらの先行論を参考にしつつ、諸本の異同を改めて提示してテキスト・クリティックを行うことで、最良のテキストを識別する。そして、それをもとに現行の教科書本文に対する評価と意味づけを行い、語りの位相を応用した新たな物語の解釈を提示したい。

一 「盆土産」の書誌と校異

まず、改めて書誌を確認しておきたい。本稿の冒頭で既述したとおり、「盆土産」の初出誌は『海』一九七九年一〇月号であり、初収録単行本（以下、初版本と略す）は『冬の雁』（文藝春秋、一九八〇年）である。そして、現在まで「盆土産」を収録し続けている光村図書版『国語2』では、底本にこの初版本の『冬の雁』を用いている^{注(4)}。しかし、「盆土産」はその後もいくつかのアンソロジーに収録されている。

初出と初版本を除いた「盆土産」の書誌を、左に列挙する。

- ・『三浦哲郎自選全集』第8巻（新潮社、一九八八年）
- ・『冬の雁』（文藝春秋社（文春文庫）、一九八九年）
- ・浅田次郎（選）・日本ペンクラブ（編）『人恋しい雨の夜に…せつない小説アンソロジー』（光文社（光文社文庫）、二〇〇六年）
- ・『教科書名短篇：少年時代』（中央公論新社（中公文庫）、二〇一六年）

三浦哲郎が二〇一〇年に死去していることを考慮すると、中公文庫版の『教科書名短篇』では、作者自らの校正はなされていない。また、光文社文庫版の『人恋しい雨の夜に』も、底本に文春文庫版『冬の雁』を用いたことが記されている。さらに、文春文庫版は自選全集を底本としており、難読漢字へ新たにルビを振る校訂しか確認できない^{注(5)}。そこで、これらのうち、初出から自選全集までの校異を示すことにした。

ここで断っておくと、前節で述べたとおり、「盆土産」の本文異同の調査はすでに先行研究でも試みられている。特に昌二佳広の論考では、教科書の異同についても言及しており、大いに参考となる。本稿では、なぜ先行論で「えびフライ」と「えんびフライ」の校異ばかりが問題視されるのか、それを視覚的にわかりやすくするため、また、資料として再利用しやすくするためにも、諸本の異同を詳しく提示しておきたい【巻末に掲載】。

初出誌から初版本への校異で最も多いのは、11〜14のような読点の追加

である。また、父親の禿げた額の日焼け痕を「色褪せていた」から「生白かった」と変えた21や、隣の喜作が着ている彼の父親からの土産であろう「派手な色の横縞のTシャツ」に「真新しい」という形容を加えた28など、表現そのものに関わる大きな校訂も施されている。中でも最も大きな校異は、地の文における「えび」と「えんび」の傍点が欠落した4であろう。傍点の有無によって、息子が彼の内面においてどれだけ両者の違いを認識できているかに差が生じる。だが、これについては、自選全集の際に再び傍点を振っていることから、単純な見落としや誤植の可能性もある。

初版本から自選全集への校訂では、16〜20で集中的に確認できるような漢字とひらがな表記の校異が多い。そして、表を俯瞰すると、やはり30と31の変化、先行論で繰り返し指摘されてきた息子と喜作との会話における「えびフライ」と「えんびフライ」の違いが突出していることがわかる。繰り返しとなるが、過去の物も含めて教科書の本文は、初版本を底本としている^{注(6)}。掲載に当たっては、たとえば「きこえる」を「聞こえる」に直したいいわゆる教育漢字の使用や、「勿論」を「もちろん」とするような公用文のルールにもとづく校訂が行われているものの、問題の箇所は初版本どおり「えびフライ」と表記しているのである。

作者である三浦自身が、決定稿としてわざわざ校訂した自選全集ないし文春文庫版『冬の雁』を光村図書は出典とせず、あるいは「えんびフライ」への修正も行っていない。その理由は不明で、昌二は、『教師用指導書』にも、出典文献を示すのみで右のこと（*「えびフライ」と「えんびフライ」の校異——引用者注）に関する注記・解説などは特に見られないので、少なくとも、敢えて積極的に「えびフライ」としたとは受け止められない」と述べている。同氏が行論上で引用した「えびフライ」と「えんびフライ」への着目を促す教科書の問いに対する指導書の解答例を見ても、積極的な理由があつて出典を選定したわけではないという判断は納得できる。

しかし、結論を先に述べれば、偶然にも、あるいは揶揄的に表現すれば安易に選定された教科書の出典である初版本のテキストは、物語の解釈に新たな地平をひらく最良のテキストであると論者は判断する。次節では、その理由をナラトロジーの観点から明らかにしたい。

二 「えびフライ」と「えんびフライ」の校異の解釈

「えびフライ」と「えんびフライ」の校異が発生した場面を改めて検討するために、現行の教科書『国語2』光村図書出版、二〇一六年の本文から該当箇所を引用する（傍線は引用者による）。

「父っちゃ、帰ったてな？」

喜作は一級上の四年生だが、偉そうに腕組みをしてこちらのぬれたビールをじろじろ見ながらそう言うので、

「んだ。」

とうなずいてから、土産は何かときかれる前に、

「えびフライ」

と言った。

喜作は氣勢をそがれたように、口を開けたままきよんとしていた。

「……なんどえ？」

「えびフライ。」

「……えびフライって、何せ。」

それが知っていたければ家に来てみる。そう言いたかったが、見せるだけでももったいないのに、ついでに一口と言われるのが怖くて、

「なんでもねっす。」

と通り過ぎた。

（九八〜九九頁）

傍線を引いた三箇所が、最終的に三浦哲郎によって「えんびフライ」と校訂された箇所であり、いずれもカギ括弧を用いた直接話法で実際に音声

として発話された言葉である。梗概で述べたように、息子はえびフライを正確に発音できず、喜作も同じ方言の圏内に住む子どもであるため、二人とも一律に「えんぴフライ」と発音したとする校訂は妥当かのように見える。だが、もしもそれを徹底するならば、えびフライとはどのような物が祖母に尋ねて「……うめもんせ。」と返答があった直後、「えびフライ……。」

／と、つぶやいてみないではいられないのだ。」(九五頁)と語られるこの「えびフライ」も修正されなければならない。もちろん、このカギ括弧をテキスト冒頭の文に呼応する強調だとか、息子の内面におけるモノロークだと解釈するのはたやすい。しかし、テキストのほかの箇所で「」が実際に発話された音声で、『』が筆記文字や括復法の再現であるというように表記が規則化されている以上、この「えびフライ」も実際に「つぶやいて」みた音声かその再現だと解釈せざるをえない。

この矛盾を考えると、昌二佳広が「教科書制作上の不備である」と指摘したことは、性急な判断だと言わざるをえない。もともと、昌二が慎重さを欠いていると批判することが本意ではなく、同氏は別の可能性についても丁寧に考察している。

実はこの場面における発話(発音)が「えびフライ」であった可能性も一方では否めない私は考えている。即ち、語り手は喜作のいくぶん高慢な態度が気に食わず、「解答例」にも見られるように、張り合うような気持ちで言ったのだと解釈できる。このとき、喜作にはおそらく何物かわからないであろう我が家の土産を、意図的に、強調的に「え・び・フライ」と言ったとも想像できるのだ。それを二度繰り返されたことにより喜作もまた相手の言葉をなぞって慎重に「え・び・フライ」と返したとも想像できる。

昌二はあくまで可能性の一つとして提示しているのであって、積極的にこの読みを主張しているわけではない。論者もこの解釈を否定はしないし

積極的に肯定もしない。それは、もつと根本的な次元で「えびフライ」の表記を肯定できる理由があるからである。

その鍵となるが「語り」の位相である。そもそも、先行研究の多くは、「盆土産」のテキストを一人称小説の亜種として捉える傾向にある。加藤郁夫は、「大人になった息子」が「あたかも小三の息子が語っているように見せる」と主張し、三村孝志は、「小学校三年生が語っているように思わせ、語り手の存在を読者が意識しないように書かれて」おり、「大人になった息子が語り手だと考えてもよいかもしれないが、この語り手は自分の存在を意識してほしくはないようである」と述べている。昌二も、加藤論を支持し、「盆土産」の語り手は、表向きには小学校三年生の少年であるが、実は語っている「今」はもう大人になっており、しかし時制を過去の時点に移し、リアルタイムなできごとのように語るという方法を用いている」と意見を重ねた。

これらの論考に共通するのは、大人になった息子を語り手だということにやや慎重な三村論も含めて、総じて語り手が何らかの実体をともなった人物だと想定している点にある。しかし、この想定はテキストの「語り」を分析する上で脆弱性をともなう。たとえば、加藤と昌二が主張する大人になった息子(少年)を語り手とする説については、野中潤が、仮に息子の名前を「哲郎」と見なして加筆することで、「三人称限定視点で書かれた小説」に転化することを証明しており、脆くも崩れざる。一方で、「一人称も三人称も使われておらず、どちらにも確定できない視点からの叙述がなされている」と発展的な解釈を提示した野中も、「小学三年生の少年の一人称視点にぴったりと寄り添いつつも、そこから隔たった場所で出来事を追体験し言語化する存在、すなわち少年が大人になって過去の出来事を再構成していると受け止めるのが妥当なところだろう」と、やはり加藤らの説に合流してしまっている。

加藤の問題提起以降、語り手を多様な観点から考察し、漸次に発展的な解釈を示した三者（あるいは慎重な三村を除けば昌二と野中の二者）が、なぜ大人になった息子（少年）が再構成した物語という解釈に帰着してしまふのだろうか。その原因は、昌二が「語り手が物語世界に内在する生身の人物」であると断言しているところに顕著に現れている。先に野中論を用いて述べたとおり、この物語は三人称小説にも転化可能で、その場合は物語世界の外から、あたかも一人称のような限定視点を装って語る構造となり、必ずしも語り手が物語世界内にいるとは断定できないのである。

そもそもナラトロジーでは、「語り」は概念的なものであり、物語世界内の「語り手」は「語り」によって仮構された虚像であると考える。ところが、日本においては、とりわけ国語教育の分野で以前から用いられてきた実体を持つ発話者としての語り手と混同され、「語り」に注目した物語構造の解釈に齟齬が生じることが多い。たとえば、ケーテ・ハンブルガーは、『物語の論理』（植和田光晴〔訳〕、松籟社、一九八六年）において、小説の語り手「物語の機能」と呼び、語り手の人格性を否定したが、透明度の高い三人称の語り手であっても、文学教材の研究ではあたかも人格を持つことが前提かのように論じられることもある。

日本語の小説において語り手が「物語世界に内在する生身の人物」だと捉えられる背景には、日本語の特殊性の問題がある。この問題は、近年のナラトロジーの解説書で最もわかりやすい、橋本陽介『ナラトロジー入門』プロップからジュネットまでの物語論』（水声社、二〇一四年）を援用すれば、次のとおりに解説できる。たとえば、フランス語の小説においては、人称代名詞が文法上必須で単純過去が用いられるが、日本語の小説では、「盆土産」のように人称代名詞を省略したり、語り手が過去のことを語る際も、「昨日」や「明日」といったダイクシスが平然と使用されたりする。こうした日本語の特徴により、「語りの現在」と（語られる）物語の現在」

という二つの時間軸が仮構され、あたかも人格を持つ語り手が自分のいる「現在」から「過去」を語っているように読者が認識するのである。

この「語り手」の位置については、ジュネットが著名な『物語のデイスクール』（花輪光・和泉涼一〔訳〕、書肆風の薔薇、一九八五年）において「ある物語言説によつて語られるどんな出来事も、その物語言説を生産する語り行為が位置している水準に対して、そのすぐうえの物語世界の水準にある」（二六七頁）と述べている。橋本の前掲書で咀嚼すれば、「要するに、語られる物語と、それを生産する語りとは別の次元」であり、「たとえ一人称の語り手がいる場合でも同じで、同じ物語世界にいるわけではない」（一四五頁）のである。

以上のナラトロジーに関する議論を前提とするならば、「盆土産」の語り手も、あくまで語りによつて仮構されたものであり、大人になった息子であるという仮定の桎梏に縛られることなく、その語り手は縦横無尽に語られる対象である息子に同化する。内的焦点化とも呼んでいいのだが、本稿ではあえて、語り手と息子の知覚の一致と捉えたい。

この語り手と息子の知覚の一致は、たとえば次の引用に見られる。

「これは車えびつうえびだけんど、海ではもつと大きなやつも捕れる。
長えひげのあるやつも捕れる。」

父親が珍しくそんな冗談を言うので、思わず首をすくめて笑ってしまつた。
（九八頁）

父親が「冗談」を言っているわけではないことは、大人である読者には自明のことである。ましてや、大人になった息子が語り手と想定するならば、語り手自身もそう思うはずである。だが、彼は「冗談」という認識を疑わない。なぜなら、「語り手」は大人になった息子という実在の人物ではなく、語られる息子と自由に一体化し、リアルタイムで父の話を聞く息子の聴覚や知覚を再現しているからである。もちろん、加藤が指摘したよう

に、語り手は息子の父を「父っちゃ」と呼ばずに「父親」と呼び、野中が指摘したように、「当時としては最先端のファッションだったはずのTシャツという語」を平然と用いている。しかしこれらも、語り手が仮構された虚像であることを前提にすれば、その自由な「語り」をどの立場で語っているのかと限定的に捉える必要はないのである。

さて、問題となつてゐる校異の考察にもう一度戻るならば、作者自身が校訂しなかつた祖母の「……うめもんせ。」の直後にある「えびフライ」という発話は、方言の発話者がしばしば自身のアクセントと標準語の相違に無自覚なように、あくまで息子自身にはそう聞こえており、語り手も彼の聴覚に同化してゐると解釈できる。そして、自選全集で「えんびフライ」と改められた箇所は、喜作と会つたのは偶然であるがゆえに、無防備な発話によつて当然「えんびフライ」と発音されたであろうし、その音につられて喜作も「えんびフライ」と呼応したはずである。しかし、発話主体である息子の耳には、あくまで自身の言葉は「えびフライ」と聞こえ、喜作の声も同じく「えびフライ」と認識されたのである。したがつて、テキスト内のカギ括弧の使用規則や虚像としての語り手を視座にこの場面を分析するならば、自身の発声に対する息子の知覚が一致している点において、校訂前の初版本の本文を最良のテキストと評価せざるをえないのである。当然のことながら、もしも三浦が、「……うめもんせ。」の直後の「えびフライ」を「えんびフライ」と修正していたならば、そのテキストが最良であろうし、論者が提起したような解釈も生まれなかつた。教科書の底本選定と同じく、偶然が功を奏したのかもしれない。

おわりに

本稿では、「盆土産」のテキスト・クリティックをつうじて、三浦哲郎による最終校訂後も初版本を典拠とし続ける教科書本文について、昌二佳広

が指摘したとおりその選定に積極性は見受けられないものの、結果として最良のテキストを掲載していることを論じた。これを踏まえ、最後にこの成果を教材研究に応用できる可能性を指摘しておきたい。

「えびフライ」を「えんびフライ」と発音し、姉に指摘されてもおお、息子は無意識に「えんびフライ」と言つてしまい、息子と同化した語り手により、自らの声を認識する聴覚としてもそれは再現されていた。だが、息子の発音そのものは直らないものの、物語内において、彼はその違いを聞き分けられるようにはなる。

祖母の『なまん、だあうち』の合間に、ふと、
「えんびフライ……。」

という言葉が混じるのを聞いた。

祖母は歯がないから、言葉はたいがい不明瞭だが、そのときは確かに、えびフライではなくえんびフライという言葉が漏らしたので。

(二〇一頁)

ここでは、わざわざ「えびフライ」ではなく「えんびフライ」と念押しされ、息子の聴覚が「確かに」その違いを聞き分けたことを語っている。彼は、両者の発音の違いに気づけるようになったのである。

ところが、最後に父親を見送る場面では、「さいなら、と言うつもりで、うっかり」「言つてしまった」言葉として「えんびフライ。」が発話される(一〇三頁)。ただし、結局「えび」と上手に発音できなかったとはいえず、ここでは、祖母の「……うめもんせ。」の直後のモノローグや喜作との会話では知覚することができなかった自らの発音の違いを、はっきり「えんびフライ」と認識することができているのである。

語られる息子は、父親が帰省して家に滞在したおよそ一日の間に、自らの発音を正確に聞き分けることができるようになった。祖母の唱える念仏の合間に聞いた「えんびフライ」から、父を見送る中で発した自らの音声

を知覚するまでの間に、墓参りに行き、亡くなった母に対する後ろめたさを息子は感じている。そのようにして、短時間のうちに彼は自己を相対化し、自らの発話を知覚できるようになったのだろう。息子と同化する語り手は、彼の成長をも再現して見せたのである。

「盆土産」の息子は、父親を見送る際に、「不意にしゃくり上げそうになるなど、感傷的で幼いイメージが漂う。また、頭をなでる父の揺さぶりが「いつもより少し手荒くて、それで頭が混乱した」息子は、さまざまな感情が交錯し、別れのあいさつの代わりに思わず「えんびフライ」と言ってしまうなど、まだまだ未熟でもある。しかし、そうした葛藤する身体の中にあつて自己の発話を相対的に認識できたところに、彼の成長が感じられるのである。

「盆土産」をめぐるのは、昌二が「父親がある年から、さらに具体的に次の正月からもう帰って来なくなってしまった」という想像をしてみるなど、作者自身の不幸な生い立ちも重なってか、ネガティブな未来を予感させる物語として解釈されることもある。しかし、論者は「えんびフライ」を「えんびフライ」と発音してしまっている自己を認識できるようにしつつ息子の姿を捉え、彼の成長の物語としてポジティブに解釈したい。そして、次に父親が同じ土産を持って帰ったときには、彼は「えんびフライ」と正確に発音できるようになっているだろう。

【注】

(1) 作者については、上田三四二「三浦哲郎」(日本近代文学館・小田切秀雄編『日本近代文学大事典』第三巻、講談社、一九七七年)を参照し、必要に応じて論者が補足した。

(2) 『中学校国語学習指導書 2上』(光村図書出版、二〇一六年)三三二頁。

(3) ほかに三村は、実践報告「三浦哲郎『盆土産』の改訂をめぐる――自らの読みを作る――」(『月刊国語教育研究』四五五号、日本国語教育学会、二〇一〇年)を発表している。だが、「えんびフライ」が「えんびフライ」に改訂された箇所があることを生徒に告げ、それがどこか根拠を含めて考えさせる授業内容については、後掲する昌二佳広が、「ここで「語り」という語を用いて何を主張しようとしたのかは、結局のところよく分からない」と批判している。

(4) 教科書には「出典 「冬の雁」とのみ記載されているが、指導書(前掲、三二頁)では、『冬の雁』(文藝春秋・一九八〇年)と明記されている。

(5) 新たにルビが追加された漢字は、「生蕎麦」(ひげま)「廂」(ひびき)「睜った」(みは)「毛脛」(けづね)「畦道」(わぢみち)「殺がれた」(ころ)「桔梗」(ききょう)「痰」(たん)の八つである。

(6) 過去の教科書間の本文異同については、昌二の指摘するとおり、漢字とひらがなの表記に若干の校異が見られる程度であるため、本稿では考察の対象としなかった。

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	No.	
11						11		10		頁	初
下						上		—		段	
15						6		7		行	
事故でもあったのではと						「きのえび」に傍点)		まわらない		校異	誌
31	30	30	30	30	30	30	29	29	29	頁	初
8	18	17	9	7	5	3	6	6	3	行	
か事故でもあったのではない	面くらって	周章てずに	いとみえて、	物をみえ、	ザッ	ジャッ	都会の人	廻らない「廻る」に置換。	足元	校異	
	428	428	428	428	428	427	427	427	427	頁	自
	15	14	5	4	2	11	6	6	3	行	
面食らって	置換。	章あわてずに「あわてる」に	「は」見動詞以外に置換。	く、ない見えて、	もの教わるのはおもしろ	「じゃつこ」は	「きのえび」に傍点)	「は」に置換。	「足許」に置換。	校異	

25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	
13	13	13		13						12	12	12	11	11	
下	下	下		上						下	上	上	下	下	
18	11	2		6						2	18	14	19	16	
にえ箱 びの蓋 フライ には『 とあり 冷凍食 品なか	東京 の上野 から	その上 、そいつ の方から		色褪 せていた						「え びフ ライ ： ： 」	の大き さに纏 めて、 コロッ ツケ	磨り潰 すかした のを手 頃な	と両方 一緒に してえ びフ ライ	な封筒 のなか には伝 票のよ う	ふだん 速達な どには
34	34	34	33	33	33	33	32	32	32	32	32	32	31	31	
17	13	6	16	11	9	7	18	16	15	12	5	3	10	8	
え箱 びの蓋 フライ には『 とあり なかに	東京 の上野 駅から	その上 そいつ の方から	塊が	生白 かった	阿弥 陀かぶ り	呶鳴 りつけ る	夕立 ちに打 たれた ように	却っ て	頗る 不味 い	「え びフ ライ ： ： 。」「	の大き さに纏 めてコ ロッ ツケ	磨り潰 すかした のを、 手頃	イと両 方一緒 にして 、えび フラ	うな封 筒のな かには 、伝票 のよ	に下、 置換。 ）「ふ だん」 は「普 段」以
432			431		431	430	430	430	430						
7			9		2	18	11	9	8						
び箱 フの蓋 ライは 『とあり 冷凍食 品なか え			塊 りが		だ 」に傍 点）	あみ だかぶ り（* 「あみ	怒鳴 りつけ る	夕立 に打 たれた ように	かえ って	置換 。）」 「まず い」に					

三浦哲郎「盆土産」における「えびフライ」と「えんびフライ」

41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	
16	16		16		15	15	14	14				14	14			
下	下		上		下	上	下	下				上	上			
21	14		16		11	21	16	14				17	15			
「はい、発車あ。」	また買ってすけ……。		河鹿が鳴いていた。		尋常ではないと思っていたのだ。	「しっぽも旨やえ。(＊「食」にルビ(へけ))	二匹ずつ食べ。(＊「食」にルビ(へけ))	籠った				細長い花火の筒を待のよう	隣でも父親が帰ったとみえて、派手な色の			
40	40	39	39	38	38	37	36	36	36	36	36	35	35	35	35	
15	10	15	12	12	9	17	16	14	10	7	3	15	14	8	5	
「はい、発車あ。」	また買ってくるすけ……。	咄嗟に、	河鹿が鳴きはじめていた。	丸い石	だ。尋常ではないと思つたのだ。	しっぽも旨やえ。	二匹ずつ食べ。	籠もつた。	怖くて、	「せ。えびフライって、なに	「えびフライ。」	のよう	細長い花火の筒を二本、刀	隣でも父親が帰ったとみえて、真新しい、派手な色の	敲きながら	一番大きなやつ
		436		435				433	433	433	433			432	432	
		14		14				20	16	13	9			16	13	
		とっさに、		まるい石				籠った。	こわくて、	「せ。えんびフライって、なに	「えんびフライ。」			「叩きながら	いちばん大柄なやつ	